

生き物との関わりを通して、生き物に目を向け、心を寄せていく子ども

— 年少 4 歳児「メダカに心を寄せよう」の実践から —

1 2 期のねらい

- ◎ 身の回りのいろいろな自然や生き物に自ら目を向け、生き物に心を寄せて関わる
- 自分なりに遊びを楽しみ、遊び方や遊びを広げていく
- いろいろな友だちと関わり、自分の思いを出しながら気の合う友だちをみつけていく
- さくら組の教師に対しての安心感や、さくら組の友だちと一緒にいることの心地よさを感じる

(◎は、特にこの実践と関わりが深いねらい)

2 保育の構想

(1) 子どものとらえについて

本学級の子どもは園庭で遊ぶことを気に入っており、雨の日でも喜んで外へ出て行くことが多い。その中でも、生き物に興味のある数人の子どもたちは、毎日のようにひょうたん池でアメンボを手で捕まえていた。その姿を見守り、教師も一緒に体験し共感していったことで、教師との会話も増え、次第に自分の思いを言葉で教師に伝えるようになった。すると、それまでその様子を見ていた周りの子どもたちも「何しているの？」とひょうたん池にやってくるようになり、池の縁に立って、アメンボを見たり捕まえようとしたりするようになっていった。その姿を子ども同士がつながる機会ととらえ、子どもたちの言葉を拾いつなげていくことで、子ども同士の会話も見られるようになっていった。また、ひょうたん池周辺にいるダンゴムシにも目を向け、他の場所にも虫探しに出かけたことで、保育室の近くで遊ぶことが多かった子どもたちが園全体の環境に目を向けて遊ぶようになった。

このように子どもたちが生き物へ目を向けるようになったのは、アメンボもダンゴムシも比較的捕まえやすく、タモなどの道具を使わなくても手で捕まえられるためであったからだととらえている。しかし捕まえた経験がなく、力の加減ができない上、虫に対する恐怖心もあるため、手でぎゅっと潰してしまったり、捕まえたことに満足感を感じ、飼育ケースに入れたまま数日経過したりすることもあった。

上記のような姿から、いろいろな自然や生き物に目を向け、関わることで、友だち関係や遊ぶ範囲が広がったり、友だちの様子を見て遊び方を考えたりすることにつながってきたと考える。生き物に心を寄せ関わることで 2 期の生活がより豊かになるととらえ、生活を構想した。

(2) 生き物と関わる経験と保育で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

先述したように、2 期では身の回りのいろいろな自然や生き物に目を向け、自ら興味をもって関わっていく中で生き物に心を寄せていってほしいと考えた。2 期の新たな環境として、地域の方が時々ひょうたん池にメダカやフナを放してくださるようになった。また、天候に恵まれることが多く外遊びがしやすくなり、チョウやトンボなどの昆虫が増える。これらのことから、生き物好きな子どもたちを中心に、ひょうたん池や園庭にいる生き物への興味が大きくなることが予想される。生き物に心を寄せ、多くの生き物と関わる中で、1 期で見られたような友だちと関わる姿や友だちの様子を見て遊び方を考える姿がさらに多く現れるであろう。特に、次の 3 つの過程において、思考力・判断力・表現力が高まっていくと考える。

まず、「見つける過程」である。始めは、どこにどのような生き物が生息しているかは分かっておらず、遊んでいたら偶然生き物がいてみつけるといことが多い。そのような偶然を繰り返して行く中で、生き物に興味をもつようになり、捕まえたいという願いに変わっていく。中には、絵本で読んだ経験からチョウは花の近くにいるのではないかと考えたり、雨が降った後にアメンボをたくさんみつけた経験からアメンボは水のある所ならいるのではないかと考えたりする子どもがいるだろう。また、どこにいるか分からない時には、教師や友だちにどこにいるかを聞くであろう。このように、虫を捕まえたいという願いが基盤となり、その願いが実現するようどうすればよいのか考えたり、それを伝えたりする必要性が生まれてくる。

次に、「捕まえる過程」である。生き物を捕まえたいという願いを実現するためには、どのようにして捕まえるかを考える必要が出てくる。始めは、虫をみつけた時に誰かに頼んだり、手を使って捕まえようとしても上手くいかなかったりする。そのうちに、虫を捕まえている友だちが網や虫カゴなど道具を持っていることに気付く。網を使い始めてからも、無作為に振り回したり、虫がいなくても網を振ってイメージの中で虫捕りを楽しんだりする。そのうちに、友だちが捕まえているのを真似したり、捕まえ方を尋ねたりするようになる。それを繰り返す中で、池の中に入った方がよいと考えたり、静かに近付いていった方がよいと考えたりして、子どもたちなりの捕まえるためのコツを見いだしていくと考える。

そして、「生き物を捕まえた後の過程」である。自分で生き物を捕まえることができた時、特に捕まえるまでに何日もかかったり、捕まえた生き物が珍しかったりした時は、生き物と一緒にいたいという気持ちをもつようになる。その際、生き物の家を作ったり、餌を与えたり、時には逃がしたりすることにも目を向けることが必要になる。また、生き物の死を目の当たりにすることも考えられる。その都度立ち止まり、どうすればよいか考えることが必要になる。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する友だちとの関わりを大切にした場面の構想について

先述した3つの過程の中で、「捕まえる過程」・「生き物を捕まえた後の過程」において、特に友だちとの関わりが多くなる。2期では友だちのよい考えを取り入れたり、友だちと思いを伝え合ったりすることにつながる次の場面を大切にしていこうと考える。

一つ目は、生き物を捕まえようとしても上手くいかない場面である。捕まえようとしても上手くいかない時、子どもは願いを叶えようとして繰り返し試したり、友だちの様子を見て場所や道具を変えてみたりする。このように、子どもが自ら考え、気付きをいかしていても上手くいかない時、教師がモデルとなり一緒にやってみたり、上手くいくまで意欲を持続させるような声をかけたりする。そうすることで、子どもは願いを実現し、捕まえた生き物により深い関心をもったり、一緒に生き物を捕まえた友だちと喜びを共有したりする。

二つ目は、生き物を飼おうとして、世話をする場面である。子どもたちは生き物を見つける過程で、生き物と生き物がいる場所の関係を次第に理解するようになる。同じように、生き物を飼う時にも、生き物のために環境を整えなければならないことを理解するまでには、たくさんの経験を積み重ねる必要がある。友だちのしていたことや友だちの気持ちを少しずつ理解し、取り入れることで、生き物を大切にしようとする気持ちが芽生え、生き物を上手に飼おうとする。

この二つの場面にかかわらず、虫を飼っている横に虫の本を置いておき、いつでも虫の絵本を見られるようにしたり、誰かが虫を捕えた時にほかの子どもたちに見せたりするなど、興味をもった子どもが生き物に接する機会が増えるようにする。

今期ではまだ友だちとの関わりをすぐにもたせるのではなく、「教師がするのを見る」「教師と一緒にする」など教師との関わりの中で、自分で生き物を捕まえることができる等、安定し

た気持ちの中でその遊びに取り組むことを大切にする。次に、子どもが自分からやってみようとするきっかけを教師が作ったり、子どもがやってみようかなと思えるような声をかけたりすることを大切にする。その中で、友だちの姿を紹介したり、生き物に詳しい友だちに話を聞くよう促したり、思いを伝え合ったりなど、子ども同士の関わりを教師が支えることで友だちとのかかわりを作り出したり、広げたりしていく。その際に、子ども同士の会話が成り立たない場合は、教師が間に入って子どもの思いをつなげるはたらきかけをする。具体的には、言葉を添えたり、言い換えたりするはたらきかけや、子どもの思いを問いかけ直すはたらきかけである。また、子どもが疑問をもったり、発見したりした時に、子ども同士がその場で思いを伝え合えるよう、周りの子どもたちにそのことを投げかけたり、ゆっくり考えられるように時間をとったりする。

これらのはたらきかけを、それぞれの子どものどのような思いをもっているのかを見取って、個々に合わせて行っていく。このことによって、子どもたちは友だちと一緒に考え、工夫することのよさを実感し、自ら進んで友だちと関わり、考えを伝え合いながら実現していく姿へと繋がっていくと考える。

3 予想される生き物との関わりを展開

時期	具体的な子どもの姿（◇印は伝え合い）
5 6 月上旬	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物の姿が見えた方へ網やタモを動かして捕まえようとする。 ・どうしたら捕まえられるか考え、友だちの捕り方を見たり、真似したりする。 ・ひょうたん池の中に入って、メダカやフナをタモで捕まえる。 ・捕まえやすい生き物をたくさん捕まえて満足し、他の色々な生き物へも目を向ける。 ・死んでしまった生き物を見て、なぜ死んでしまったかを考える。
6 6 月中旬	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物を捕まえるために、静かにして探したり、網やタモを静かに動かして捕まえようとしたりする。 ・草むらの中にバツの赤ちゃんを見つけ、草の中にいることを知り、草むらを探すようになる。 ◇前に生き物がいた場所を探したり、どこにいるか話したりする。 ・自分が捕まえた生き物に名前を付けたり、じっと眺めたりする。 ◇死なせないために、どうしたらいいか考えたり、調べたり、友だちや教師に聞いたりする。

4 保育の実際

(1) メダカを捕まえ、心を寄せ始めた子どもたち

6月1日、子どもたちはいつものように池の縁に並んで、タモを片手に何回も水面につけては、すくうという動作を繰り返していた。しかし実際は届いていなかったため、教師がタモを持ち、自らが池の中に入って捕まえることで、モデルを示したが、子どもたちは教師が捕まえたことで満足し、池の中に入らなかった。

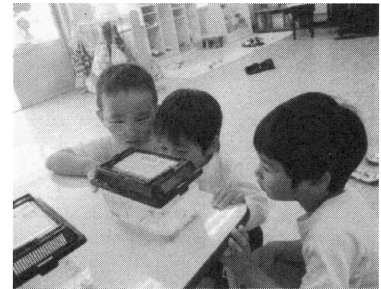
6月5日、それまで同様、園児Aと園児Bが池の縁からタモを使ってメダカを捕まえようとしていたが、タモを持つ手を最大限伸ばしていた。

その姿に「なかなか捕まえられんね。池の中に入った方が捕まえやすいのかな。」と声をかけた。すると、「はいってみる。」とすぐに園児Aと園児Bが池の中に入っていった。園児Aが「みやすい。」と顔を水面に近づけると、メダカがよく見えることに気付いた。その様子を見ていた園児Cも、足の甲まで浸かって



捕まえようとした。園児Aは十数匹のメダカを捕まえ、ケースに入れて保育室へ戻り、園児Bと一緒に長い間捕まえたメダカを眺めていた。園児Cは、しばらくして1匹のメダカを捕まえることができた。「ぼく、はじめてメダカつかまえた！ぼくが！」と興奮気味に話す園児Cに共感し、教師は共に喜んだ。そしてじっとケースの中のメダカを眺めている園児Cに「どうした？」と声をかけると、「メダカがわらった」と嬉しそうに答えた。

5月下旬から、子どもたちはメダカを捕まえようとする時に、目でメダカを追うようになっていった。メダカの姿を目で追えるようになったことで、捕まえることができそうだという希望をもち、捕まえようとする意欲が大きくなっていることを感じた。しかし池の縁からでは子どもたちがタモを使ってメダカに届かない範囲の方が広く、池の外から捕まえることは難しいことに教師は気付いた。池の中に入った方がタモの届く範囲が広がり、捕まえやすいのではないかと気付くきっかけになってほしいと願い、教師は池の中に入りメダカを捕まえる姿を見せた。



園児A、園児B、園児Cは、池の中に入ることを嫌い、それまで一度も池の中に入ったことがなかった。6月5日、園児Aと園児Bがタモを持つ手を最大限に伸ばしていたのは、池に入らずにメダカを捕まえる方法を考えた結果の姿だったのではないだろうか。園児Aと園児Bは、6月1日に、以前教師が池の中に入ってメダカを捕まえるのを見ている。池の中に入ることを躊躇しているが、入った方がメダカを捕まえやすいのではないかとということも考えていたであろう。教師が気持ちを後押しする言葉をかけたことで、捕まえたいという願いを実現するために、池の中に入ることを自分で決めたのではないだろうか。池に入った園児Aの「みやすい。」という言葉から、捕まえたいという願いを実現しやすくなったと園児Aが判断していることがうかがえる。また、園児Aの言葉を受け、園児Cも池の中に入ったことから、捕まえたいという願いを実現するために園児Aのやり方が有効であることに気付き、いかしていることが分かる。何日もかけて自分で捕まえることができたからこそ、園児A、園児Bのメダカを長い間眺める姿や園児Cの「メダカがわらった。」という言葉につながったと考える。これらは、以前は見られなかった姿であり、3人が以前よりも、メダカに心を寄せていることが分かる。

(2) メダカに心を寄せ、世話をする子どもたち

6月19日の登園後、園児Aが興奮気味に「せんせい！メダカが2（ひき）、おしりにたまごをつけてる。」と水槽の前から教師を呼んだ。その声に引きつけられるように、教師の回りにいた子どもたちも走って見に行った。すると、確かにメダカが2匹、卵をつけていた。メダカが卵をつけるところを初めて見た子どもたちは、「わぁ〜。」と感嘆の声を挙げ、「あかちゃんがうまれるってこと？」と期待感に満ちあふれていた。卵を発見した子どもたちは、「みてみて。」と卵がついていることを周りの友だちにも教えていた。



その日から毎日のように、登園するとすぐに「きょうは、たまごはどうか。」と水槽の前に子どもが集まって、お腹に卵がついているか観察するようになった。数日後、園児Dはメダカの図鑑を開き、「せんせい、いしがいっぱいいるみたい。」と図鑑の水槽が描いてあるイラストに指をさして言った。教師と一緒に覗き、「本当だね。石って幼稚園にあるかな？」と声をかけると、「わたししってる！」と自ら取りに行き、何個も入れて「いえできた！」と喜んでいて。園児Eは耳を水槽に近付け、「ふんふん…せんせい、おなかすいたっていつてるよ〜。」と教師に伝えに来たので、「あら、Eちゃんにはメダカさんの声

が聞こえたの？」と声をかけた。すると、周りの子どもも同じように耳を水槽に近付けた。それ以降、子どもたちは「おなかすいたみたいだよ。」と教師に伝えに来るようになった。子どもに餌やりを任せると、メダカが餌を食べる様子を間近で見て、「うわぁ、たべた！たべた！」と声をあげて喜んだ。

園児Aは、自分で捕まえてきたメダカの様子を毎日見ている。園児Aがメダカが卵をつけたことをみんなに伝えたことで、ほかの子どもたちも毎日メダカの様子を気にするようになった。卵を付けているのを見た子どもは「あかちゃんがうまれるってこと？」という疑問をもった。メダカの卵からメダカの赤ちゃんが生まれてくるということに確信はもてないが、今まで関わってきた生き物との経験を基に、卵から赤ちゃんが出てくるのではないかと予想していることがうかがえる。



その中でも、園児Dは、メダカへの興味から飼育の仕方が載っている図鑑を開いた。そのことから、メダカのためにお家を作ってあげたいという願いや自分なりに家作りをする姿へとつながった。この1週間前に園児Aがカエルを捕まえてきた時に、園児Aは図鑑を開いたり、年長の教師に聞いたりして、家作りをしていた。この園児Aの行動を見た経験が、園児Dが図鑑を見ようと考えたきっかけになったのではないかと考える。4歳児であるので、飼い方を調べるために図鑑を開いたのではない。書いてある文章を読んだり、全て書いてある通りにしようと考えたりすることはないが、自分なりの解釈で生き物のために家を作ってあげたいという願いは強く感じられた。そのため、教師と一緒に図鑑を覗き、話をしたことで、園児Dが願いを実現するために行動することへとつながった。

園児Eは、以前カエルを自分で捕まえたが、餌をやらなかったためカエルが死んでしまったという経験をしていた。その経験を基に、餌がないとメダカが死んでしまうと考え、耳を水槽に近づけ、「ふんふん…せんせい、おなかすいたっていってるよ〜。」という姿につながったと考える。この姿を見たことで、周りの子どもたちも真似して同じような仕草をするようになった。子どもが自分たちで餌をあげることで、メダカへの興味がより深まると思い、子どもたちが餌をあげるようにした。その結果、子どもたちが喜んでメダカに餌をやり、メダカに心を寄せて世話をする姿へとつながっていった。

(3) メダカに心を寄せ、死に立ち止まる子どもたち

6月28日、飼っていたメダカが4匹死んでしまい、水槽に浮かんでいるのを登園してきた子どもたちがみつけた。子どもたちは「うごかないね〜。」と死んだメダカの体をつついたり、「お〜い。」と声をかけたりしていた。しかし教師が子どもたちにどうするかを尋ねても、子どもたちからは「かわいそうだね。」という言葉しか出てこなかった。



そこで、教師が墓を作ろうと子どもたちに提案し、どのように作るかは子どもたちが考えた。「どこに埋めてあげたらいいかな。」と子どもたちと一緒に園庭で埋める場所を探していると、園児Fが「あつくないところがいいとおもう、メダカさんあついのいやだから！」と言い、園児Gは「みずのなかがいいかな？」と言った。園児Hは「かげのところがいいよ。」と言って、日陰で水の近くの場所を指さすと、園児F、園児Gも「うん、いいね。」と納得し、そこに埋めることにした。

お墓の場所が決まった頃には、多くの子どもたちが集まってきていた。地面が固く、掘れなかったため、

教師が「どうやって掘る?」「どうやったら簡単に掘れる?」と投げかけると、子どもたちは思い思いの考えを述べ、自分たちで掘る人、水をかける人に分かれて墓を掘り進めていった。深く掘れた穴にメダカを埋め、目印になる石で墓を囲み、木の棒を上から立て、子どもたちと一緒に手を合わせて「げんきでね。」と声をかけた。

登園後の時点で、子どもたちは死んだメダカに対してどう反応しているかわからず、つついたり、声をかけたりしていた。その姿から生き返ってほしいと願っている子どももいるのだととらえたため、教師は子どもたちのその願いを大切にしようと考えた。この事例以前にも、子どもたちが死に立ち止まる場面は何度かあった。しかし、その時は可哀相という言葉も出て来ず、「ねてるんだよ」という子どもが多かった。



その時とは異なる反応をしている子どもたちが生き物の死に立ち止まるために、長い時間向き合うことが必要なのではないかと考え、今回は2時間子どもたちの姿を見守った。その後、生き物が死んだ時には墓を作るということを経験してほしいと願い、教師が墓を作ることを提案した。

墓の場所を決める時、園児Fが「あつくないところがいいとおもう、メダカさんあついのいやだから!」と言ったのは、メダカのことを思う気持ちから出た言葉である。同じように、園児G、園児Hも自分なりにメダカのことを考えて、場所を選んだ。

その後、ほかの子どもたちが長時間墓作りに関わったことも、メダカに心を寄せて眺めたり、世話をしたりしてきたからこそ見られた姿であると考えられる。

この事例の1週間後には、園児Bはこの経験を基に、園児I、園児Jと一緒にバツタのための墓を以前作ったカエルの墓の横に並べるように作った。そしてなぜ隣に作ったか尋ねると、一緒に作っていた園児Iと一緒に「だって、となりだったらさみしくないでしょ」と笑顔で答えた。教師のはたらきかけがなくても、自分たちで考えて、行動していることが分かる。

5 成果と課題

教師が子どもの願いを見取り、モデルを示したり、子どもの気持ちを後押しする言葉をかけたりするなどはたらきかけをしたことは、子どもが自分の願いを実現するために行動に移すことにつながっていった。また、考えたことを行動に移した子どもがどのようにするか見守ることは、子どもの願いを的確に見取るために必要なはたらきかけであった。そして同じ願いをもった子どもたちがそれぞれの思いを言動で表せるようにしていったことで、子どもたちは4歳児なりに思いを伝え合っていた。また生き物と関わる中でさまざまな場面で立ち止まりながら、生き物に目を向け、心を寄せるよう支えていったことで、様々な生き物に心を寄せていった。

このような経験を通して生き物に目を向け、心を寄せていった子どもたちではあるが、まだ自己中心的な可愛がり方をする場面も見られる。今後大切にしようという気持ちをもって、生き物を扱うことができるよう、年長や生き物を大切にしている友だちの姿に目を向けられるような言葉を投げかけていく必要がある。また、興味をもちにくい子どもがいる中で伝え合う場をどのように行か、興味をもちにくい子どもに対して、今後どのようにはたらきかけていくのが課題である。この点についても、興味のある子どもの姿や発見などを伝えていくことで、興味をもちにくい子どもの気持ちも変化していくのではないかと考える。(文責 阿武 麻衣)